

きざりのわらわ

NO. 26
月刊

昭和五年八月一日 発行
（非売品）
発行所 岡山県窪郡吉備町庭瀬七、七字垣方
吉備親老陽會

○太田 收

明治廿三年の一月十六日、庭瀬東平野ニハ番地の旧家、太田始四郎の三男に生れた。太田家は藩政時代この地の庄屋を勤めた家柄である。七百石 庄屋 太田傳四郎とあり。この傳四郎は始四郎の義父にして、つまり收の祖父に当る人である。父の始四郎は吉備郡川辺村の本陣、日枝久敬の次男として安政五年八月五日生れ、太田傳四郎の娘、八千代に養嗣にきた人で、村長などの要職を勤め村政に貢献したのである。八千代の同一子、宗次郎をあげたが、母子とも先歿し後妻として会津藩の国老であった手代本勝任の長女元枝を娶ったのである。元枝は先夫某の間に文・築の二女をもうけたが故あって離別し、この二女を連れ太田家へ再婚した。始四郎との間に生れたのが、收の二男と登茂江、登末子、芳子の三女である。

△ この收の外祖父に当る手代本勝任は会津藩の僕物にして、幕末史上に活躍した佐幕派の大立物であるので、その事蹟を詳しく述べてみる。手代本勝任は通稱を直右衛門といひ、文政九年会津藩士佐々木源八の男として生れ、同藩士手代本勝富に嗣がなみ、たので手代本家を継いだのである。時に幕末の頃にして内外の世情は騒然を極め各藩は勤王派と佐幕派にわかれ、喧々囂々去就に迷ふ状態であつた。会津藩は徳川幕府の譜代の臣にして勢い幕府方に忠誠を盡さなければならぬ、事情をかかされていたのである。勝任は二十八歳の嘉永六年に藩主松平容保に従つて

房総沿岸の警備に当り、北以後君側を待て藩政をみるに至つた。安政六年には監察使として江戸詣となり回事に奔走した。偶々久三年八月朝議は俄かに変り攘夷派の三條實美以下公卿七人とも、当時皇居守護の任にあつた長州藩兵は解みれて長門へ奔つたのである。これを七卿落といつてゐる。これに替つて手代本勝任は藩命によつて上京し、皇居守護の役を勤めた。当時諸國には尊王討幕の浪士が起り、鼎のわくが如き様相を呈したのである。なみにも備前藩士藤本津之進眞金は岡山、宇野西河原の出身、浪士七十余人を率いて天誅組と稱し、大和國五條に兵を擧げて幕府に抗した。会津藩ではその情勢を探るため藩士平向熊吉、吉松三内があたりを偵察に赴かされたが、佐幕方の郡山藩兵のためには誤殺せられた。よつて手代本勝任は郡山藩に出張し、実情を調査し善處するところがあつた。やがて援擢せられ藩の公用人に進み同年十二月徳川將軍家茂が海路上京する時には大坂まで出迎へ、京阪の間を往來して時局の收拾に盡した。又浪士逮捕吏の監護の役を命ぜられ、新撰組或は所司代及び所奉行の吏卒を指揮して浪人組數十人を捕へ、牢獄に投じ或は斬殺に處した。元治元年討幕派の長州藩は君側を清めんとし兵を率いて京師に迫つた。手代本勝任は編者を探して会津、桑名の藩兵を督して蛤御門に防戦して長州勢を撃退した。これが原因となつて長州征伐が起つたが、長州藩の恭順によつて一時をさまつた。しかし和議はならず再び征長の軍を起し石見、周防の國境で両軍は交戦したが幕軍方の士氣は振はず、偶々二年十月將軍家茂は病のため大坂で薨じたので征長の軍を停めた。かくて同年十二月に慶喜が十五代將軍に就いたが幕府の威信は全く地に墮ちた。長州は薩摩と知して連合軍を京師に送り、会津、桑名にかわつて皇居を守護した。將軍慶喜は大政奉還に意を決し上表して政權を奉還

した。時に慶應三年十月十四日、徳川幕府は二百六十五年の夢をとり全

く廢せられたのである。京都に駐在していた幕軍は禍の身に及ばんことを虞れ、京都を去つて一

先づ大坂に却つた。必合津、桑名、高松、淡田、松山、其の他旗本勢の三万

余はこれに憤慨して豫いの慶喜を擁して立ちあがり明治元年一月京都へ

上らんと鳥羽、伏見の両道から進撃して薩長の連合軍と交戦した。大坂より

て退却し和歌山藩の助力によつて辛うじて藩兵を乗船せしめて大坂より

海路江戸へ退いた。既にして合津藩は明治元年五月、米沢、仙台、両藩に

使して奥州諸藩の間に奔走して徳川幕府擁護連盟を結成し、最後まで坑

戦せんとの決意を示したので官軍は、大軍を動員して合津若松城に迫り激

しく急団攻撃を加へたのである。当時幕年寄であつた手代本勝は使者

として城を脱出し米沢に赴いた。盟約は意の如くをうかば、援軍のない城

兵は一個月余の防戦に彈藥兵糧は盡きついに落城したのである。

落城の後手代本勝は捕へられ、猪苗代に居留を命ぜられ、後ち鳥

取藩に幽閑の身となり、ついで高須藩、名古屋藩などに転々と移された。

吉時手代本勝には妻喜代子との間に十三歳になる元枝を頭に妹の中枝

は八歳、下枝は三歳の三子があつた。喜代子はこのいといけなや鬼を抱

えて、戰禍に居ては懐かれ、主人と別れて路頭にさまよひ、敗戦の憂き苦勞

をしみみみ身につけ悲憤な日を送つたことである。

明治五年始めて手代本勝は罪を赦されて香川県或は高知県の権参事

を歴任し、同十一年には岡山県吏として赴任し岡山学務課長、川上、賀

陽、西北、東南、各郡長を勤め正六位勲六等に叙せられた。後ち

岡山區長(今の市長)となり同廿七年辞してからは岡山市、野田町に寓居し

て晩年を樂み、明治廿六年六月三日七十九歳で歿した。墳墓は岡山市の

笠山墓地にある。手代本勝は右派安佐、秋月胤永ともには合津の三傑

といはれる人物である。勝は二人の身がある。次々主馬といひ勝任の

實子実松が早世したので手代本家を継ぎ、赤の身の只三郎は出て同藩士

の親族佐々木太夫の家を嗣いだ。この只三郎は幕末の頃、京都の鬼廻組

である。清川八郎は文久三年四月江戸で斬殺せられた。坂本龍馬の殺された寺田屋事件は講談や小説になじみの深い所であるが、

たので氣力を失つてその場へドット昏倒してしまつた。

他の山とリは懐太郎に切り込んかつた。彼れも佩刀を腰風のうしろへ置
いていたののでそれを取ら取らなくスバヤク短刀を手にして立ち上つた女
技く余裕がなく、鞘のまゝで受刃された。レみレ初めの太刀で後頭部を
深く切られ痛手に堪えぬ終に失神して前不せに倒れたのである。

襲撃者は懐太郎の死を確かめにあつて内外に飛出されたが、懐太郎
は重傷であつたので、まもなく絶命した。只三郎等は暗殺の街道を悠々
と「裏経」少しも騒がず、「止」と鞍馬天狗の謡を唄つて一同立ち去つたと
いう。時は慶應三年十一月二日の夜、只三郎は三十五歳であつた。

この暗殺事件は長い間下手人がわからず当時新撰組のやつたことだと
傳へていた。後ちに新撰組の隊長近藤 勇が野州流山で捕縛された時
取調に彼れは頑強にその真相を語らなかつたという。これなら三十四年
を経た明治三十三年に至つて襲撃した一行のうち一人である今井信郎
が北に瀨んじ初めを自白したので漸くその事実が明かになり、たつてある。

只三郎の笑兎手代本勝任が明治三十六年四山の寓居で逝去する数日前
に或る知人に龍馬を斬殺したのは実弟の只三郎であり、その命令を下し
たものは当時京都守護職のちに見廻組に属した今津藩主松平容保であ
つた。と語つたと、この事件を公にすることは累を藩主に及ぼす恐
れがあつたので承らく直右衛門が沈黙を守つたのである。

△ 收はこうした母方の血統を受け、薫育せられ岡山、第六高等学校を終
へ帝國大学を優秀な成績で卒業し、小池國三の経営してゐた株屋へ一
務員として勤務した。後ち山一証券株式会社に轉じて累進し推される初
代の社長に就任した。偶昭和十三年二月に支那事業に際して会社の経営
に失敗し数拾萬円の鉄損を生じた。又会社拡張の目的で増資せんとし

重役連中との間に意見を異にして、一時に恥を辞してその責任をとり自ら
に籠つてゐたが五月廿八日の夜、遺書を認め、毒物を飲み自殺をとり
のである。時に四拾九歳の働き盛りで生涯を終つた。

收は生來母方にあたる今津氣質を受け、父に負けじ嫌の性格を持つた。
勝任に似て眼光は鋭く人を射る風平があり意志の強さをあらはしてい
た。幼少の頃は村の劍鬼大将として子供仲間を恐れらされた。それこ
明敏細敏な性質はよくその地位を占めることだぞ來のである。

父か、性格の持主が何故に証券界の如き金融機関に身を投じたのであ
らうか、それは大学を卒業して政治家に志したが、同郷の大先輩である大養
本堂翁 野崎幻庵翁の門を叩いて相談に赴いた處、この頃の政治家にな
るには莫大の財産が必要だけれど到底大物にはなれないという話であつた。

知人などは株屋になるなとだめだよ。と忠言を受けたが氣一卒の性質
なので自分で思つたことは一歩も引かぬ氣性であつたから自ら好んで飛
び込んだのである。

妻は大正八年三月三十歳の時に、野崎幻庵翁の媒酌によつて赤十字病
院長難波 一の次女弘子と結婚したが、その翌年の三月一日産後の生立
が悪く、不幸にして母子ともこの世を去つたのである。同十二年に後
妻を迎へたのが藤島大麻夫という人の長女利子で、利子は二十歳であつ
た。レタレレの後妻の昭和七年八月廿日に病にかかつて死去したのであ
る。

（兄の徳は弟とさう性質は正反対で妥協的な溫和な處があり、本家と自身をたて清水組の教師長な
どを勤めた。）

△ 收が巻紙に書き遺した家族への文面に
回顧すれば二十数年間自らの努力も自己の不明不徳のため萬事夢の如く

水泡に帰す。今更何の頼あつて社会の人々に申訳あらむ。たゞく生前の皆
様に御厚情を蒙りレこのみ深く感謝す。この時老母のこと、小児のことの
み思ひ自己の決心を銘らす。レタレ自己の不測、不徳は社会の人に對し申訳
なく唯自己は何等法律上の問題を起したることなし。自己の不徳のため社
会に迷惑を及べレことを考へる時、一瞬も晏如たるを得ず。ここに自ら處決
して社会にお詫ひする。最後に自己の心中を現して、社会の人、会社関係者一
同にお詫を申す次第なり。此一会社は基礎強く何等心配するところなし。自
己のため少なりか迷惑を蒙らしめたと思ふ時、一時も安住するところを得ず。
いはんとするに多し。感慨多し、老母に對する不幸中訴なく、平素孝養專一
に考へたるも、結局は大不幸となり。お詫ひせしむるもなし。子供等は今まで不
自由なく生活したるも、今より不遇の者たらんとす。許してくれ。
(遺書は句読点はない)。これによつてみれば余程責任親念の旺盛な人で、武
士の流さくんでいふことがよく窺れるのである。

△ 收の死後遺産を調べたら三拾萬円は下らなかつたという。今の金に換
算するとゴフと六千萬円にも達する。將來大政治家を目途としていたが、
治家として遺場に治蹟をこめてあつたであらうと思はれる。

△ 大辰の役にフツて
この役は(内辰とは明治元年の干支である)。西南の雄藩によつて討幕派と佐幕派と
の戦で所謂鳥羽、伏見、上野、会津、函館(函館は明治二年に平定したがこの役に加はる)
の戦を総稱したもので、前述の記事と重複の感みがあるが、サレ詳しく記
して参考に供した。

(一) 鳥羽伏見の戦
明治元年一月三日(慶應四年八月)明治と改む(二六六) 幕府は譜代の藩兵
七

二萬余、徳川慶喜(よしのぶ)を擁して京都に上らんと大坂をめぐり鳥羽街道と
伏見街道の二手にわかれ、進撃を開始した。鳥羽方面に向つたのは桑
名藩兵、松山(高野高梁)見廻組、大垣藩兵の連合軍、老中格の松平豊前
守正質が指揮をとり、伏見方面には会津藩兵、津田藩兵、高松藩兵
新探組などの連合軍を若年寄の竹中丹後守重圓が指揮した。(見廻組は
陣中、津田藩主一万石、藤田相模守松孝と下總般菴領主六千石、松平出雲守
康正の二人である)

一方薩摩藩兵は伊地知正忠を大将として京都を進發し、これを邀撃し
て砲火をあひせ、大いに破つた。この戦は明かに幕府方が朝廷に及々向
けたのである。そこで朝廷は仁和寺宮嘉彰親王(よしのぶ)を征東総督に任
じ、錦旗を樹てて敵軍を破つて大坂に迫つた。慶喜は会津、桑名の諸藩
兵を従へて海路江戸へ遁走した。

(二) 上野の戦
徳川慶喜は將軍取を辞して恭順の意をあらわれ、大政の奉還をしたので
有栖川宮熾仁親王(よしのぶ)を東征総督として西御陸盛を参謀として江戸城
明渡しのため京都を出發した。

徒ら諸藩は薩、長、紀、備、備、因、佐、出、長、大村、細川、鍋前、藤堂
など東海道を進み、又副総督として岩倉具定は薩、長の一部と、因
大垣の藩兵を率いて東山道に向つた。江戸では文字通り城中は鼎の
如く騒が起り町民は上を下へと疎開の準備に慌しい様相を呈した。

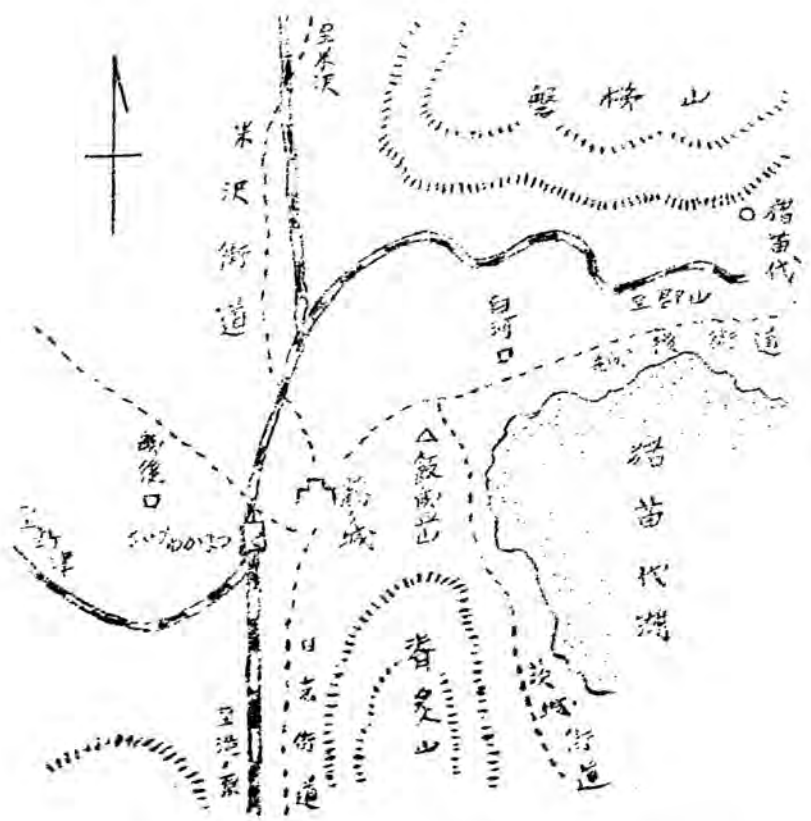
二百六十五年間、徳川幕府恩顧の家臣は座して滅亡をみるに忍びず。
と、箱根の險を扼して東北諸藩と結んで防戦の計画をたてた。文藝の
始まれば官軍に従つていふ西南の諸藩のうちには必ず内意するものも
出てくるだろうという諷刺もあつた。しかも薩、安房は大局を達観し

同胞の争ふ時ではないと主張した。これ大勢になれば「フランス」は幕府を助けるに力が入り込めば朝廷に味方する。こうなれば英佛戦争となつて日本は列強の蹂躪に任せねばならぬことになる。そこで勝安房は純正で平和的に解決を願ひ、慶喜も戦意がなくなり上野に退いて謹慎の意を表した。幕府は再三使者を遣はして徳川氏の処分を寛大なうんことを願つた。しかし再び勢に衰じた官軍は江戸城を屠つて慶喜の首を刎ねればやまずと、益々進撃してついに一隊は品川、板橋の線に達し、将に百万の人口を有する江戸に砲火をあげせんとする形勢を示した。徳川方には最後の「一戦を期せん」とするものも少くないが、危急在士の秋に際し、勝安房は官軍の参謀西郷隆盛を高橋の薩摩屋敷に合見した。安房は拳闘一致の必要を力説し、徒らに争ふ時でない、和睦の切論を強調したので、隆盛は度量の大きな人物であつたから只一言のうちに受諾し、軍に令して進撃中止せしめ、ここに江戸は戦禍を免れたのである。

(勝安房は江戸の旗本の家に生れた低い身分の者である。俗に講太郎といふ。海舟といふ砲術航海術者も幕府の海軍創設者。新政府に迎へられ海軍卿、枢密顧問官になつた。一西郷隆盛は薩摩藩士の出で、通称は吉世助。幕府を南洲といふ。安政の文政の月照といふ水戸藩の士で、藩士島津久忠と意見を合はせ、島津に流されたのち上京し、倒幕論を唱へ王政復古を成就させた。新政府に陸軍大将となつた。征韓論に於ては、彼が御に帰り、明治十年推されて参謀総長西南戦争を起した。このころは、彼が御に帰るに渡り、本が多数は一戦だも交へずして江戸城を渡すことは武門の恥辱となり、同年五月十五日彰義隊を組織し、東北地方の不滿浪士を集めて、輔王寺宮公現法親王(後の北白川宮能久親王)を戴き、この上野東叡山に立籠つて反旗をたてた。官軍の軍務官大村益次郎はその日折梅の雨を冒して本御天神台に大砲を据えて、黒門口に砲火を集中し、一宵に四方を多回攻撃を加へ、白刃を閃かして渡り合ひ、両中に血煙りをた

て、自然戦を演じたが官軍の一斉射撃にあつて、撃破となり、ついに黒門口は破れ、彰義隊は糾を失つて潰滅したのである。この兵亂によつて、東叡山の七堂伽藍は悉く烏有に帰したのである。この戦い、この項未だ(三) 今津の戦 (一次子記載)

△今津吾松附近略図



婦人服・子供服

アジモト

岡山市新西大寺町 19
電話 29154番

20の洞を切り取り持参すれば
特価品を除いて一割引にて奉仕致します。

表ハテ町筋

○折西大寺町

海津

天王堂

「良い品を安価で気軽に買へる」

セルササビスの店

源

河内百貨店

吉備町撫川。電話七番